私が学んだ

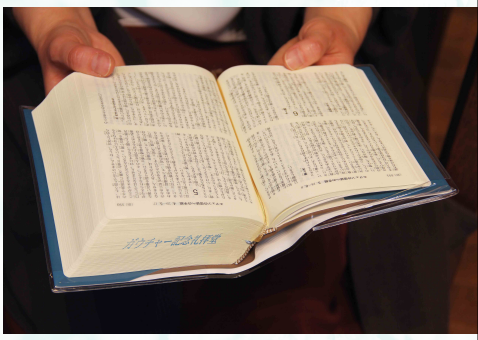
聖書の言葉

青山学院で学んだ日々。この学び舎で学び、一人ひとりを支え、
励まし、導いてくれた聖書の言葉。
新たな旅立ちのいま、初等部から大学の皆さんに、
聖書から学んだことを綴っていただきました。

The Word of God is alive and active.
Hebrews 4:12

主のしつけと諭(さと)しによって育てなさい。

エフェソの信徒への手紙 6章4節



大学教育人間科学部教授
大森秀子

この聖句は主にある子育てを示している。この養育が駝鳥の教育と対比されるのを知ったのは、米国近代宗教教育の父と呼ばれるブッシュネルの思想を通してである。ヨブ記 39章 14 ～17節には、産んだ卵を地面の中に埋め砂で暖め、野の獣によって踏みにじられることに無頓着な駝鳥が描かれている。カーライルもまた駝鳥の教育を反面教師とした。カーライルの『衣服哲学』に登場するトイフェルスドレック教授は誕生後すぐにアンドレアス老夫婦に預けられた。子どものそばに置かれた洗礼証明書には、ディオゲネスというクリスチャン・ネームが記されていた。名前はこの世に生まれた人間の最初の衣服である。衣服に包まれた魂はそのまま放置されてはならない。幸いにも12歳の時に父母が育ての親であることを知った彼の内面は破壊されておらず、後に宇宙・自然の本質へと思索を深める。子どもが神の愛に守られ、永遠を思う心が育てられることを願う。

あなたの贖(あがな)い主、イスラエルの聖なる方
主はこう言われる。
私は主、あなたの神。
私はあなたの益となることを教え
あなたの歩むべき道にあなたを導く。

イザヤ書 48章17節

大学総合文化政策学部４年

ラサン イースター

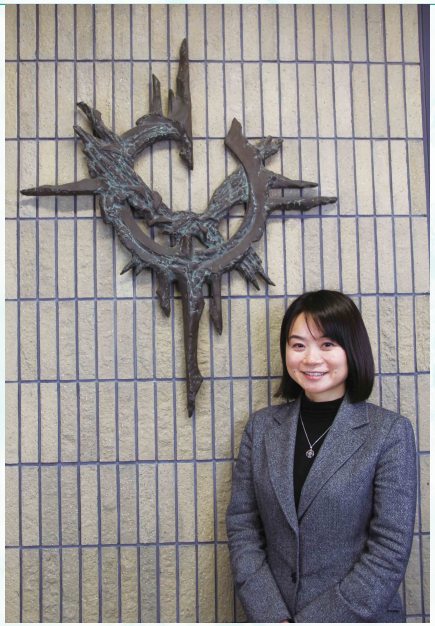
2020年の私の日記にこの聖書の言葉が書いてありました。当時、書いた理由は覚えていませんが、イレギュラーとなったコロナ禍で過ごした学生生活で私の心の支えになった言葉であるのは間違いありません。その時を思い返すと、悩み苦しみ、大変だった時にはいつも私を支えてくれる助け手が与えられました。その助け手は神様が与えてくださり、時間がかかっても私を正しい道に導いてくれたのだと思います。この出来事を通して神様はどんな状況でも共にいてくださることを実感しました。

学生生活が終わり、4月からの新生活で不安と期待の気持ちが混ざっていますが、益とされる神様の力を信じて、備えられた道を力強く歩んでいきたいと思います。

あなたがたは
キリストの体であり、
一人一人は
その部分です。

コリントの信徒への手紙一

12章 27節



高等部聖書科教諭

北川理恵

なぜあの人が持っているものを私は持っていないのか。なぜあの人ができることを私はできないのか。そんな風に他人と比べてばかりいた私の価値観が大転換するきっかけとなった言葉です。

12章12～27節は私たちを一つの体に例えています。自分を中心に物事を見ていた時は、望むものを持っていない自分は価値が無いように感じていました。でも、「もし体全体が目だったら、どこで聞きますか。もし全体が耳だったら、どこで嗅ぎますか。そこで神は、御心のままに、体に一つ一つの部分を置かれたのです」という言葉によって、神様が望んで今の私を存在させてくださっているのだと知りました。そして、神様の望みのままに用いてくださいと祈るようになりました。私が持っていない力を持っている人、私と違う性格の人がいることは、脅威ではなく、豊かさなのだと教えてもらいました。

今でも人と比べて落ち込んだり、考えの違いに戸惑ったりすることもありますが、そのたびにこの聖句を思い出します。

教えはシオンから　主の言葉はエルサレムから出るからだ。
主は国々の間を裁き多くの民のために判決を下される。
彼らはその剣(つるぎ)を鋤(すき)に　その槍(やり)を鎌(かま)に打ち直す。
国は国に向かって剣を上げず　もはや戦いを学ぶことはない。
ヤコブの家よ、さあ、主の光の中を歩もう。

イザヤ書 2章2～5節（一部抜粋）

中等部3年

岩田優衣

愛と平和

私達74期生は様々な制限があった中でも礼拝、聖書の授業などを通して神様を知ることができました。特に記憶に残っているのはこの非戦平和思想を語っている聖句です。私は初めて目にしたとき、なんて不可能なことなのだろうと感じました。剣を鋤とし槍を鎌にうちかえる「真の平和」、それは私には夢物語のように思えたのです。

しかし、友人と緑蔭キャンプに参加し、人間の心には必ず隣人愛が存在するということを学びました。平和は愛によって実現します。その愛を神様は人間に備えていてくださいました。神様から頂いた愛を、私たちは忘れてしまっているのです。

愛の精神を思い出すために私たちは何をすればよいのか。平和が失われつつある今、神様は私たちに問うているのではないでしょうか。

だが、お前のあの弟は死んでいたのに生き返った。
いなくなっていたのに見つかったのだ。
喜び祝うのは当然ではないか。

ルカによる福音書 15章 11～32節「いなくなった息子」のたとえ（一部抜粋）

初等部６年

国友 心

私は放蕩娘

初めて「放蕩息子」のたとえ話を聞いた時、（まじめなお兄さんがかわいそう。お父さんは自分勝手な弟に甘すぎる。）、弟と母の顔を頭に思い浮かべながら、私はもやもやしていました。

ところが、6年生になり初等部生活を振り返る機会が増えると、これまでやらかした失敗の数々を思い出し、（おやっ？　私は兄の立場だと思っていたけれど、ひょっとして放蕩息子の方では？）と思うようになりました。最近は、彫刻刀でグサッと手を切って4針縫ったし、事務室を探して学校で迷子になったこともあったなぁ、日本庭園で池ポチャもしたなぁ、と。

たくさん失敗しても、支えてくださった先生方に感謝しつつ、私も他者の失敗に寛容で、喜びを分かち合える人になりたいです。